

Heroldo de HEL

N-ro36

aŭtuno, 1990

北海道エスペラント連盟

068 岩見沢市1条東6丁目 法然寺気付

ORGANO DE

HOKKAJDA ESPERANTO-LIGO:

Iwamizawa-si, Itizyô, higasi-6-tyôme,
Hônenzi-kizuke, 068 Japanio

Gejoj paradis en San-Francisko

TOMITA Minako (Sapporo)

San-Francisko, en la 24a de junio, 1990

Kara redaktoro de Heroldo de HEL

Saluton! Kiel vi fartas? Mi fartas tre bone. San-Francisko Universitato estas tre bela loko. La manĝaĵo estas bongusta, altkaloria, do mi dikiĝas. Kamarado Miyazawa ankaŭ fartas bone. Lecionoj estas interesaj, sed ni spertis pli interesajn okazaĵojn.

En la 22a ni vidis membrojn de la Ligo de Samseksamaj Geesperantistoj. Ili estis tre gajaj kaj ĝentilaj homoj, kiujn mi tre ŝatas. Ni veturis al la Castro Strato kaj trinkis bieron kun ili. Tie ni vidis kelke da nudaj viroj kaj virinoj, kiuj dancis sur balkono. Amaso da pasantoj sur la strato vidis ilin kaj bruegis. Ankaŭ ni ĝojis. En la sama tago per ĵurnalo mi legis ke 500 opoziciuloj obstrukcis trafikon de Market Strato por postuli multe pli da helpo al malsanaj virinoj de

★講演会『イランの文化・生活を語る』

イランのジャーナリストでエスペラントの s-ro M. REZA Kfeir-Khahさんがスライドを使って講演します。通訳つきですから、お友だちもさそっておいでください。入場無料です。

1990年10月3日(水)午後2時~4時
会場: 札幌市中央区北1西3MNビル3F

(時計台向い) 札幌国際交流プラザ

主催: 北海道エスペラント連盟

札幌エスペラント会

★第54回北海道エスペラント大会

苫小牧市 1990年9月29日/30日
大会終了後も不在参加(1000円)、寄付を申し受けます。連盟会費(1991年01月~12月=2000円)もお早めに。

郵便振替 小樽0-17075

北海道エスペラント連盟

INDULGON!

Kiel kutime(!), ĉi-tiu numero prokrastite aperis pro personaj kialoj de la tajpanto. Mi plorpetas vian indulgon. La tajpanto

AIDS, kaj 140 el ili estis arestitaj.

Vespere de la 23a ni kaj niaj amikoj de la Esperanta kurso spektis kinon "La Longa Tempo por la Amikoj", kiu esprimas timon de HIV (AIDS) inter samseksamuloj. Tio enhavas multe da tragedio.

En la 24a ni partoprenis en la parado de gesamseksamuloj. Tio estis la plej granda parado de gesamseksamuloj en Usono tra la jaro. Kaj tio pretendis pri libero de gesamseksamuloj kaj postulis helpon al AIDS-pacientoj. La titolo de la parado estas "La futuro estas nia". Multegaj popoloj partoprenis, iu mem deklaris kaj iu nudiĝis. Ni disdonis flugfolion. Multegaj, multegaj rigardantoj subtenis ilin. Mi enviis ilin, kiuj povas fari tian grandan paradon.

Sed, kruela problemo estas kaŝata malantaŭ ili: ekzemple, la problemo de HIV. En pasinta tempo multaj samseksamuloj mortis pro la malsano kaj eĉ nun en malgranda urbo estas diskriminacio, pro tio estas tre malfacile partopreni la paradon de samseksamuloj el tiu urbo.

Mi pli kaj pli volas koni ilin.

Ĝis revido en Sapporo!

(gejo = samseksamulo....rim. de la red.)

Vi trovis en ĉi-tiu numero naskiĝon de nova skribantino plena je scivolemo kaj kuraĝo. Leginte ŝian interesan leteron el San-Francisko, tuj venis ideo al la kapo de la red., ke ŝia raporto estu metita sur la unua paĝo de nia organo, kvankam la red. ne havas inklinon por gejo. (Cetere, ŝi mem ne estas gejino.)

La red. ĉiam opinias, ke por nia movado necesas juna sango, kiu refreŝigas organizon, akcelas la progreson de la movado kaj promesas al Esperanto brilan estontecon. Bonvenigenda estas apero de novaj samidean(in)oj. Kaj tio devas certe speguliĝi sur nia presorgano.

En la lastaj numeroj de Heroldo de HEL ofte skribis novaj kaj junaj samideanoj, kiuj apartenas al SAT-grupo de Sapporo, kun interesigaj temoj. Ankaŭ TOMITA Minako estas SAT-anino. Oni povas diri, ke nun tiuj SAT-anoj motoras nian movadon en nia insulo! (Kk)

La Movado

北海道関連ニュースも毎号掲載の西日本の4E連盟の共同機関誌。ページをくるとに全国の運動の熱気が伝わってくる! ときには、かのE-ista roto <Antauen>は romantika iluzio だった、とショックも与えてくれる雑誌。

日本エスペラント界の良心、
北斗七星、ラ・モバードを読もう

月刊 16p. 年間購読料3200円

振替:大阪 6-60436 ラ・モバード社

(この広告は Heroldo de HEL 編集部が勝手に掲載したものです)

世界連邦運動の同志・永田明子さん

札幌 吉原正八郎

永田明子さんは、私と同じくエスペラントと世界連邦との両方の会員であった。どちらが誘ったというわけではなく、気がついたら二人とも両方の会員だったという次第である。

永田さんは1965年に世界連邦論文コンテストに全国からの応募 176篇のうちで一位入選を果たし、サンフランシスコで開かれた第12回世界連邦世界大会に招待されて、演説をやってきた。

このときは、私からの強いすすめによって、やっと彼女はその気になり、私と共同研究の形で構想を練りあげた。出来あがった論文を見せられたとき、「ウーン、これはいけるぞ」と私は心中ふかく期するところがあったが、案の定、後日東京の世界連邦本部から電話が入って、「あなたのお弟子さんが見事一位に入選しました」と知らせてきたときは、踊りあがって喜んだ。

私は永田さんに変な難儀をかけたことがある。それは、米国の法曹グレンヴィル・クラークらの大著『世界法による世界平和』の日本語訳の出版について、国際基督教大学の鮎沢巖教授から私のところに共同翻訳の申入れがあって、私はその執筆を引き受けた。ところが、私は実務が多忙でとても執筆の時間が取れないので、永田さんに話したところ快諾してくれた。彼女はせっせと翻訳原

稿を私の手元に運んでくれたが、その途中で鮎沢教授から、共同翻訳は中止するとの通告を受けたため、机上にうず高く積まれた原稿はついに陽の目をみることはなかった。

論文入選2年後の1967年に札幌で開かれた第8回世界連邦北海道大会では、記念行事として模擬国連総会が演じられた。このとき永田さんは青年学生部の指導者となって、これを企画実行した。これには日米ソをはじめ13ヶ国の代表が並んだのだが、永田さんはアフリカのザンビア国の代表役を演じ、顔を黒く塗り、それなりの服装に身を包んで、“個人募集による国連警察の常設”を提案して活発な討論を展開した。

1963年に東京で開かれた第11回世界連邦世界大会のとき、会場が大混雑だったので、はぐれないようにと私は永田さんの手を握ってグイグイ引っぱって歩いたところ、「なんだか、おかしいわ」と彼女に言われて、「ああ、永田さんはfraulino（お嬢さん）だったんだね」と、あわてて手を放したことも懐かしい思い出である。私と永田さんとは親子ほども歳が違うけれど、心を許した同志として交際してきた――それが遠い異郷にあって孤独のうちに死を急ぐとは、痛恨のきわみである。合掌。

永田さんを身近に感じたとき

苫小牧 影浦 泰子

N-ro 35 の永田明子さんの追悼特集を読み、あらためて彼女の偉大さを感じました。そして、ともいまましい気持ちで一杯です。

私がはじめて永田さんにお会いしたのは、今からもう30数年ほど前のことです。たしか札幌の

豊平館で行なわれた北海道エスペラント大会のときだったと思います。当時の私は、自己紹介するのがやっとという状態でした。ところが永田さんは私と同じくらいの年齢に見えるのですが、すでに札幌の大ベテランの中で堂々としていらしたよ

うに記憶しています。

その後も大会でしかお目にかからなかったのですか、いつも、きびしいひきしまった顔でてきばき行動されていました。ときには、こわい感じさえしました。今思えば、そのきびしさは永田さんを世界の永田さんたらしめた原動力だったのでしょう。

しかし、そんな永田さんにも別の一面を垣間みて、何かしらほっとしたことを思い出します。あれは世界連邦運動の懸賞論文に入選され、アメリカへ出発される時だったと思います。色白のふっくらした顔によくお似合いのオレンジ色のブラウスを着て、笑顔いっぱいで見送りの人たちの中で明るく話していました。そこには、いつもの才女とは違ったふつうのお嬢さんの姿があったのです。そのとき、永田さんがとても身近に感じられました。

残念ながら、永田さんがオランダに行かれてからは一度もお会いする機会がなかったのですが、その後のご活躍よりはエスペラント誌などで知り、たいへん誇りに思っていました。これからもますます世界のエスペラント界でご活躍されるものと確信いたしておりましたのに、とても残念です。

心からご冥福をお祈りいたします。

今年1月、オランダで逝去された永田明子さんの思い出をと、北海道エスペラント連盟顧問・弁護士吉原正八郎さん、苫小牧の影浦泰子さんにお願ひしました。お二人ともすぐに原稿を送ってくださいましたが、本誌の発行が大幅に遅れたため、お二人にはたいへんなご迷惑をおかけしました。おわびいたします。

また、児玉広夫さんの『世界市民としての永田さん(2)』は編集の都合で次号以降の掲載を予定しています。

(編集部)

K I U K I E L

★今年5月の北海道E合宿に横浜市から参加した中村栄治さんは、そのまま道東・野付郡別海町に居住することになった。中村さんは心身障害者の小規模作業所の運営を手伝いながら、自宅をパスポルタ・セルボに登録して、別海を国際的な文化と生活交流の拠点にしたいと奔走。別海にも緑星旗がひるがえった！ 物心ともに応援しよう！

連絡先 〒086-02 野付郡別海町旭町55

ポプラの家 中村栄治 ☎ 01537-5-0484

★北見工大助教授の大島俊之さんは文部省在外研究員として6月から10ヶ月間、アメリカ合州国バージニア工科大学に留学中。米国での住所は、

Foxridge 12100, Blacksburg,

Virginia 24060, USA

★函館の佐々木将人さんが結婚した(「エスペラントの世界」5月号)。おなじく函館の岩井正久さんがこの夏、子づれでハンガリーを旅行したという。青函トンネルが開通してから、函館からのニュースは東京経由で札幌に届くようになった。

★7月14日から21日までキューバでひらかれた世界エスペラント大会に札幌の山岸悦子さん、瀬川綾子さん、馬場恵美子さんが参加した。札幌の宮沢直人さん、富田美奈子さんは6月から7月にかけてサンフランシスコの夏季E講座を受講して、メキシコ経由で帰ってきた。

★カナダの s-anino Alice kazmierowski が9月初め札幌を訪れ、9月5日歓迎会があった。札幌、苫小牧から18人が出席。

★児玉広夫さん(札幌エス会会長)は引続き日本エスペラント大会常置委員(第75回大会代表)に選任された。

★札幌の入門講座の講師がこの秋から宮岸忠孝さんから若手の矢田真里子さんにバトンタッチします。矢田さんは宮岸さんの教え子。この夏、スペインでE-istoを訪ねた実践家、期待しましょう。

北海道エスペラント観光案内試訳 (3)

千歳 渡辺 康子

Urbo Titose (1)

Parolante pri urbo Titose estas bone konata la aerhaveno kaj la milita bazo, krome troviĝas fama lago.

Proksime de Titose ekzistas severa kaldrona lago Sikotu, kiu aperis antaŭ tridek du mil jaroj. Ĝi estas longa je kvardek du kilometroj laŭ la ĉirkaŭo, kaj tute ne frostiĝas eĉ se vintre pro la profundegeco.

La meza akvatemperaturo (3.6 gradoj/C) estas la plej malalta el la lagoj en Japanio kaj ĝi montras tre sovaĝan aspekton, pro tio ĝi impresigas al mi nordecan klimaton.

Mia urbo havas pli ol sepdek ok mil loĝantoj kaj viroj estas pli multaj ol virinoj, kiel urbo de bazo.

La speciala produktaĵo de Titose estas gelago. Ĝi havas koloron bluapurpuran kaj estas mistera planto, alportita el Siberio per migrobirdoj. Per ĝi oni produktas diversajn kukaĵojn kun specialgusto dorĉacida. Nun ĝi estas tre fama produktaĵo en Titose.

Kaj en mia urbo ĉiam aŭdiĝas bruega zumo de aeroplanoj dumtage, precipe en la distrikto, kie mi loĝas estas tre malfacile aŭdebla la sonoj de televido aŭ telefono, kiam malfermiĝas la fenestro. Vere, la bruado daŭras senĉese pro alterna flugado de civila aŭ ekzerca aviadiloj.

千歳市 (1)

千歳といえば空港と基地の町として知られており、他に有名な支笏湖があります。

支笏湖は千歳から近く、今から3万2千年前に出来たカルデラ湖です。囲42キロメートルの深い湖で、この深さのため冬でも凍りません。

平均水温は3.6度と、日本の湖で最低。荒々しく男性的といわれており、それが北国らしい風景を印象づけています。

わたしの町の住民は7万8千人以上で、基地の町らしく女性より男性の人口が多い。

千歳の特産品はハスカップで、青紫の神秘的な植物です。それは、渡り鳥によってシベリアから運ばれて来たものです。ハスカップを使って甘酸っぱく独特の風味をもったいろいろなお菓子が作られて、今では千歳の名物になっています。

そして、わたしの町はいつも飛行機の音がうるさく、わたしが住んでいるこの地域は、とりわけ日中は窓を開けるとテレビや電話の音が非常に聴きづらい。まったく、民間の飛行機、訓練機が交互に飛び交い、絶間なく騒音が続いています。

北海道合宿（5月、札幌市）に25名が参加

馬場恵美子

今年の春の合宿は5月3・4・5日（2泊3日）札幌市南区の滝野自然公園・札幌市青少年山の家で行われた。

合宿の場所については、札幌近辺、しかも“低料金で自由のきくところ”という難問をクリアすることを考えた。この山の家は去年秋にオープンしたばかりということで、不安材料もあり予約はしたものの4月に下見をした。最初、バス停から山の家までの山道を徒歩でと考えていたが、景観も悪く、おまけに50分の道のり。その分を合宿に有効に使用した方がよい。寝具は寝袋ということで反発はあったが、マットもあり、そう寝苦しいものでもないらしいことなどを確認した。

実際、合宿中は地下鉄終点の真駒内駅から適宜乗用車で送り迎えサービスをし、合宿終了時に回収したアンケートの結果では、心配された寝袋についての不評は割と少なかった。

早い時期から日本エスペラント学会常務理事・国際部長の菊島和子さんが参加を申し出てくれたので、菊島さんの「有効利用」（とても失礼な言い方で申し訳ないのですが）を含めたクラス編成、講師陣の人選が進められた。家族ぐるみの参加が見込まれていたので小学生・幼児と父母を一つにしてこども・入門（講師：木村喜壬治、馬場）、初級（児玉広夫）、会話（菊島）。もう一つ文法と会話の中間的な意味あいをもつ中級クラス（星田淳）を考えた。

3月から連盟会員全員に合宿案内を送付したにもかかわらず、申し込みの出足が鈍く、最終的には28名（おとな20名、こども5名、寄付参加3名）の参加となったものの、なかなか人数が確定せずハラハラさせられた。そんな中で La Revuo Orienta に掲載された合宿案内を見て、横浜から

参加してくれた中村栄治さんには大感激。ご高齢にもかかわらずご自分の体験を伝えようという意気込みを感じた。また柴田真吾さん、カワハラ・カズヤさんは家族全員で参加して合宿をととても楽しい雰囲気盛り上げた。しかし、せめて1日だけでも参加を、と期待していた日帰り参加はあまりなく予想と現実の違いを表わしたようだ。

第1日目夜の分科会は「おしゃべりの会」（進行役：渡辺康子）、「変動の時代とエスペラントの可能性」（佐藤英治）。2日目夜は国際文通入門をテーマに菊島さんが講演。自分の「常識」が国によってはまったく意味の持たないものであることを豊富な国際的活動から具体例をあげながら楽しく聞かせてくれた。なんとカワハラさんの通訳つきで！

菊島さんの参加で得たものは大きかった。“勉強の仕方”がちょっとした小道具や言葉でどんどん広がり、いつの間にか引き込まれていく。なによりも、エスペラントを使うことの大切さ、楽しさを教えてくれた。すごいです。「また来てもらえるようにあなたから頼んでよ」と何人からも言われた。また来てください、これは本気です。

合宿終了後、88年日本大会 Gaja Vespero 会場だったサントリービール園で菊島さん歓迎兼慰労会が7人の参加でもたれ、ざわついているホールの中にあっても、ちょっと目立つジンギスカン・パーティーとなった。

（'90北海道エスペラント合宿実行委員長）

合宿期間中に図書販売を常設し、38種50冊、金額では42,790円の売上げがあった（おとな20人の平均でいうと2,139円）。売れた著者別だと、1位 Krizantemo、次いで小西岳、宮本正男の順。

読書ノートから

須藤 昭三

"Febro" István Nemere 著
(ハンガリー、1984年刊、131p. 1200円)

“いま彼がやって来たぞ。灰色のスボン、茶の靴、短いそでの白いシャツ、書類入れ。事務屋のようだ。でも彼が技術屋なのを俺は知っているんだ、二つほど俺より若い、すると41か”。

Nemereを続けて読むつもりでこれを購入したが、その始めの部分である。主人公（名前が出て来ないので“俺”としておく）はこの技師を殺害すべく、彼の仕事帰りを向い側の喫茶店のテラスで待伏せしている。それが不思議にサングラスをしているので苦笑する。

“黒い眼鏡が俺を覆っている、俺の全体をだ。もし誰かが俺の目を見たらたぶん俺がよからぬことを企んでいることがわかる。でも誰も知るまい”。

なぜ殺害を考えるようになったのか――。実は技師の妻 Anna をひとめ見たときから彼女は俺のものだ思い、結局彼女と出来てしまう。しかし Anna はあることで死んでしまう（あまり詳しく書くと読者の妨害になるので省略する）、それで“俺”は技師を“お前が Anna を殺したんだ”と付けまわすようになる。

仕事場の技師を幾度となく電話口呼び出し“お前が Anna を殺したんだ”とそれだけ言って受話器を置くことを続ける。殺害の方法を考える。毒殺するか、車でひき殺すか、

最後に鉄パイプを持ってうろつく。こういう“俺”は、なんと有名な作家なのである。

物語の筋は、ありえないとは言わないが、無茶苦茶だなあ、と思ったりする。スタイルとしては現実と思いが交互に書かれている。例えば、待伏せしている状態から突然 Anna が前に腰かけて会話をしながら微笑している場面が続くかと思えば、行が変わって技師の後を付けまわす場面が変わる。だから出来るだけ短時間で読んでしまわないと混乱する恐れがある。しかし最後まで読者を引きつけてゆくのは、やはり著者の力だろう。面白い。

ところで話題が全然別になって恐縮だが、室蘭市長が最近、アメリカ・テネシー州のノックスヴィル市と姉妹都市提携する意思のあることを公式に発表した。エスペ란チストが住んでいるだろうかと思って調べたら、ノックスヴィルから 700^{km}ほど離れているが同じテネシー州にひとり見つけたので、その人に調査を頼んだら返事をくれた。

“お前さんは俺の名前を古い年鑑で見たね。俺は 4,5年前からデレギートではないんだよ。でもお前さんのたつての頼みだから喜んで返事をしよう。北米エスペラント・リーグにノックスヴィルから一人だけ登録されている、住所と名前はこれこれだ――。彼のことを俺は知らない、俺のところから 670^{km}離れているんだ。まあ、お前さんが手紙を書いたらよい返事が来るよ、祈っている、じゃな!”。

早速、私は教えられた彼に手紙を書いて返事を待っている。なんなら便利なものだ!

(室蘭エスペラント会)

(本書のご購入は、最寄りの書店で「日本エスペラント学会発行」と指定してご注文ください)

札幌で見つかったブルガリア人の蔵書

Bulgara Esperantisto (BE) 90年6月号に、“Libro de Ivan Krestanov”と題して、“Japana esperantisto Mijazaua....”で始まる短文が出ていた(右にコピーを掲載)。札幌のSATano 宮沢直人が古本屋で見つけた本の話だ。話は1年前にさかのぼる。

昨年7月、札幌で見せられた本の蔵書印、BEと違うのは名前の綴りが Krestanoff だったことだけだったかと思う。面白いことと思っていたところ、BEの昨年7月号に Krestanovの名が出た。どうもあの本のもとの持主らしく、しかもブルガリアの運動の大先輩のもよう(①私からブルガリアの友 Petko Bobevへの手紙参照)。

この本 Anjo はロシアの文豪 Turgenev の作品のエスペラント訳で、1910年 Tiflis (現在のソ連グルジア共和国首府 Tbilisi) で発行されている。この Krestanovについては Petkoがくわしく説明してくれた。Petko 自身も会ったことがある pioniro で、パリのSAT本部で働いていたこともあり、百歳の長寿を保ったとのこと。なかなかたいした人物だったようだ(②参照)。

ところで、日本語の古い本の中に、この人 Krestanovのことが出ているのを見つけた(③『エスペランチストの思い出』ADA原作、白木欽松訳、1930年、名古屋・江崎正文堂発行)。ここに出てくるイバン・クレストアノフ、話は1909年のことだが Krestanovに間違いはない。当時すでにUEAの delegitoだったらしい。

ところで、これらを知らせてくれた Petko Bobev について。ブルガリアのほぼ中央 Stara Zagoraに住む元大学講師、現在化学技師。日本にも来たことがあり、知人も多い。彼には記事を見たとの手紙を出した(④参照)。

苫小牧 星田 淳

INTERESA FAKTO

Libro de Ivan Krestanov

Japana esperantisto Mijazaua el la plej norda insulo Hokaido tute hazarde trovis en brokantejo la libron „Anjo” de Ivan Turgenev, *tradukitan en Esperanton de d-ro Fiŝer kaj Damjatin. En la libro troviĝas verda stampo „Hejma biblioteko, Ivan Krestanov, Pirdop — Bulgario”. Li estis ege surprizita, ke en tiun nordan japanan insulon laŭ nekonata vojo venis libro el tia fora lando Bulgario. Lige kun tio, s-ano Acuŝi Hoŝida, mia bona leteramik, petis de mi pluan informon pri Ivan Krestanov. Helpe de veterana esperantisto Nikola Aleksiev mi sendis detalajn informojn pri bulgara E-pioniro Ivan Krestanov. Ricevinte mian leteron, A. Hoŝida skribis: „.... Min tre interesis kaj impresis via rakonto pri via pioniro Ivan Krestanov. Mi informos miajn amikojn kaj japanojn ĝenerale laŭ via letero.”

Acuŝi Hoŝida havas grandan interesiĝon pri perestrojko en nia lando.

ing. Petko BONEV,
Stara Zagora

...a E-centro. Gi
Zamenhofan
i la Interna
esperanto kaj
lon de la es-
la historio por
duko de nova
izacio.

„Ŝtona dor-
lak Dizdar es-
te E-Ligo de
Hercegovino
189). La 38
cikloj legindas
kvalitoj de la
ankaŭ pro la
ko de Jovan
ĉ uzis praes-
kon por spe-
nalon maxi-
e.

„Liriko inti-
en 1988 en
11 poemojn
ová Miloš Lu-
la Jevsejeva.

biblioteko”
nova iniciato
-Ligo. N-ro 1
historio” estas
„Fervojista
eto — Zag-
39”, kiu aperis
5-jariĝo de la
la unuaktaĵo
ilija Lapenna,
88 en Belartaj
UEA, komen-
iteraturo”. „El
(kolekto de
aj internaciaj
en Esperanto)
la sama serio.
eksaj etforma-
EL estas eldo-
200—300 ek-
ni antaŭvidas
„Lingvistiko”.
vas esti eldo-
ne. Ni gratulas

„BE”

① El letero de Hoŝida al Bonev

Tomakomai, 1989.11.17

Kara amiko,

Kun ĝojo kaj danko mi ricevis vian interesan leteron de 1. nov. (.....)

La nomo de Ivan Krestanov, kiu esp-istigis R. Tricikov en 1914, multe surprizis min (p.4). Ĉar mia amiko Mijazaua trovis libron kun lia nomo en brokantejo. En la libro troviĝas jena verda stampo:

HEJMA BIBLIOTEKO

Ivan H.Krestanoff

Pirdop-Bulgario

Kaj troviĝas ankaŭ donacverto de D-ro A.Fiser (Tiflis) el malproksima Kaŭkazo. La titolo de la libro estas: "Anjo", rakonto de Ivan Turgenjev, tradukita de D-ro A.Fiser (Tiflis) kaj Zamjatin (Voronej), eldonita en Tiflis Presejo "Progreso", Mihajl. porsp.102, jaro 1910.

Mi ne scias, kia hazardo alportis la libreton al Sapporo, la ĉefurbo de Hokkajdo, la plej norda insulo de Japanio. Tamen -- mi volas scii, kia estis la pioniro bulgara, Ivan Krestanoff. Ĉu vi bonvolus iom skribi al mi? (.....)

② El letero de Bonev al Hoŝida

Stara Zagora, 1989.12.13

Kara amiko,

Elkore mi dankas por via letero de 17.11. (.....)

Pri Ivan Krestanov: Mi persone konas lin kaj lian edzinon vizitante lian domon antaŭ 46 jaroj en mia junaĝo en Sofio. Ivan Krestanov estas rimarkinda pioniro de bulgara E-movado. Li komencis funkcii kiel esperantisto jam en la unua jardeko de ## jarcento. Post la fino de la Unua mondmilito li eldonis en unu volumo Esperanto-bulgara kaj Bulgara-esperanta vortarojn. En 1924 li kompilis unuafoje en la monda E-literaturo Antologion de bulgara literaturo (poezio kaj prozo). Saman jaron aperis, post lia, ankaŭ Antologio de la kataluna (hispana) literaturo. Do, pioniroj tiurilate

estas la Bulgara kaj la (Katalinia) Kataluna antologioj. Ivan Krestanov estis instruisto de Franca lingvo, sed li gvidis ankaŭ kursojn de E-to por lernantoj kaj civitanoj. Dum kelkaj jaroj li estis diplomato. Poste li verkis librojn pri Bulgario en E-to por konatigi al la fremdlandanoj Bulgarion. Ivan Krestanov laboris kelkajn jarojn ankaŭ en la sidejo de SAT en Parizo. Li havis grandan, ŝajnas al mi la plej grandan tiutempe, E-to bibliotekon. Li havis ankaŭ grandan esp.arkivon, kiun liaj amikoj transdonis al Bulgara E-to muzeo en Sofio. En lia naskurbo Pirdop (alinomita je Srednigorie) oni oficiale festis lian 100-jariĝon. Li mortis antaŭ kelkaj jaroj. Nun neniu povos klarigi la vojon de la libro "Anjo" de Ivan Krestanov, dediĉita al Krestanov de la tradukintoj, al Hokkajdo. Vi estas feliĉa, ke vi vidis ĝin.

③ 『エスペランチストの思い出』から

そこで、我々は、其の公会堂のテーブルの傍へと座を占めたのだが、間もなく、中背の紳士、矢張り緑の星で胸間を飾って居る一がやつて来た。その紳士はロシアの同志へエス語で挨拶する。私も彼へと紹介される。その紳士はイバン・クレスタノブであつた。(.....)

クレスタノブは、万国エスペラント協会の組織と目的を話してくれる。彼はソフィオの町で其の代表だつたのだ。

(ADA 著、白木欽松訳、1930年刊、p.56)

④ El letero de Hoŝida al Bonev

Tomakomai, 1990.8.8

Estimata samideano Petko !

Kun ĝojo mi trovis vian raporton pri mia skribo pri Ivan Krestanov. Bonvolu permesi min transpreni la artikolon en mian organon, mi petas. Mijazaua, la aĉetinto de "Anjo" vojaĝis al San-Francisko pro tiea Somera Esperanto-Kurso.

La nomon de Ivan Krestanov mi trovis en malnova libro "Rememoroj de Esperantisto" de alia vialanda pioniro ADA (Atanas D. Atanasov) eldonita antaŭ 1930. Tie mi legis, ke ADA renkontis Krestanovon en 1909. Tiam li estis jam UEA-ano.

エスペラント運動私史（４）

小樽 山本昭二郎

私のエスペラント交友録

私は至って好奇心の強い方で、面白そうとなればやってみる。釣り、碁、将棋、麻雀その他。こういっては何だが、エスペラントも好奇心の標的だった。碁、将棋などは二段までは容易にいけたが、それ以上は進歩しない。というのはトコトンまでやらないからで、エスペラントも komencanto（初学者）とあまり変らない。

若い時は生活が安定しなかったので、一般のサラリーをもらう人たちのように、休日は休める、会合や大会に出席できるという訳にはいかない。エスペラントをマスターして外国旅行する、普及活動するというのはっきりした目標があると随分違うが、私にはどれもこれも不可能で、先々を考えると気持ちがなえてしまう。その私が LEONTODO を手がけ、今こうして40年前のことを思い出し、思い出し書いている。いろいろな苦勞や、samideanoj との交流など、とても懐かしい。わが青春に悔いなし、である。

私は“エスペラント交友録”を書こうと思って書き始めたが、脱線ばかりしてなかなか進まない。それで『鬼平犯科帳』など気晴らしに読みながら書いているが、面白いものだからつい時間をとられてしまう。

私は友という字のつくものが好きだ。友邦、朋友、友情、隣友朝市、みな好きだ。“遠友夜学校”などは遠くなった明治・大正を偲ばせ、なにやらロマンチック、センチメンタルな気持ちになる。

遠友夜学校＝新渡部稲造が1893年に独立基督教会の日曜学校として現・札幌市中央区に創設し、翌年、遠友夜学校と改称、1944年に閉校。（編）

エスペラントでも kamarado、samideano、amiko、amikino、amikeco など響きもよく好ましい。

ロマンチックといえ、十勝の幸福は昔は幸震といった筈、幸福より幸震の方が味わいがある。ひところ十勝の広尾線の愛国→幸福の切符がすごく売れていたが、9年前、私の娘が長女を出産したので、その頃十勝・広尾町にいた友人に「今日の日付で“新生”駅の入場券を買ってほしい」と電話をかけた。やがて送られてきた切符は、新生→大樹、大樹→新生の2枚。駅員に「いま売っています」とすすめられたとのこと。その広尾線も今は廃線になった。

中沢天眼さんの思い出

中沢天眼さんが天眼さんになって27年になる。逝去の1ヶ月前に、生まれたばかりの甥の名前の相談に訪れたのが最後になってしまった。ある日天眼さんの奥様からハガキがきた。「中沢養助儀、〇月〇日死去いたしました。つきましては生前親しくして頂いた山本さんに御焼香をお願いいたします……」という文面。びっくりし、早速参上して焼香し、奥様とお話しをした。

私は山賀勇先生宅の木曜日の例会に顔を出していたが、山賀先生が講師になり“Marta”（寡婦マルタ）などを輪読している間ちゅう、わたしはエスペラントの雑誌や外国からの手紙など、字引を引き引き読んでいた。1950年頃の木曜会の顔ぶれは、山賀、前田幸一、江口音吉、土田静子、早川昇、高橋達治、佳山やす子、脇坂圭治、藤川、中沢さん等である。中沢さんはいん熱心で山賀先生にいろいろ質問していたようだ。

例会の帰りに中沢さんと一緒になり誘われてお

宅に寄った。山賀、中沢宅は同じ花園町で、私は住ノ江町、歩いても近かった。そのとき以来、何十回も訪問し、LEONTODO を発行することである。天眼という名前から判るように観相と姓名判断を職業としていた。

新聞にも載ったくらいたいへんなヘビースモーカーで、ほとんど手からタバコを離したことがない。また読書家で、西陽のあたる八畳間は洋綴じ和綴じの本が畳の上に何千冊も積み重なって、マンハッタンの摩天楼のよう。年中和服を着ていて、またそれが似合っていた。大きな白髪頭で眉太く、眼が少し出ていてちょっとヤブにらみ、やや強い近眼鏡をかけていた。

そのころ、中沢さんはLa Revue Orientaのエス文和訳に応募していた。私もマネしたのだが、三宅史平さんの出題はなかなか難しく、私は常時60点内外、中沢さんは80~90点くらい。「夜と霧」「ハムレット」「コンチキ号漂流記」などが印象に残っている。中沢さんのこの時のペンネームはkoboldo。札幌のアリマ・ヨシハルさんの中沢さん宅に案内したとき、アリマさんにこのペンネームの説明をしていたが、なかなか面白かった。本名の養助→養介→妖怪→koboldo というのだが、中沢さんは眼玉がギョロリとしていたから、いかにもkoboldo(妖怪)に見えた。

ある夜、ウイスキーをご馳走しよう、といって緑色の縦長、偏平の瓶を傾けてそのキャップに注いでくれた。ぐっとあおるとジーンと舌がしびれ、よい香りが鼻からぬける。「きみ、これは二級だよ。三級に比べたらずいぶん違うだろう……」といった調子。1950年前後の私は酒のみでなかったから、そんなものかなと聞いていたが今は外国の特級洋酒も二、三千円で買える。今の私ならその1本もさげて“Bonan vesperon”と行くところだ。

でも中沢さんはもういない。時折なつかしく思い出することによって、その恩に感謝するのみであ

る。『青い鳥』にもある、故人のことを思い出すと、「忘れないでくれたか」と故人は喜ぶそうである。

三ッ石清さんのこと

今から20年前、私は札幌の南10条石山通りに一室借りた。私の所属していたプリント印刷店の軽印刷の仕事が少なくなり、女子のタイピストを何人も遊ばせておくのは勿体ないと、本来ガリ版の仕事なのにタイプに廻してしまうので、私の収入は月3,000円にもならず、札幌間の汽車定期代にも足りない。やむを得ずフリーランサーになるため部屋を一つ借りたのだが、これは薪炭店の2階で畳が5枚バタバタと並べただけの部屋で、5畳で5,000円。細長い部屋で実に暮しにくかった。寝布団もないので東京の高島屋に二組1,500円の布団を通信販売で注文した。

三ッ石さんからの手紙で北海道に久しぶり来られる、というので札幌の私の仕事場にも泊めてあげられると、思っていたら布団の到着が遅れて間に合わなかった。土日は小樽に帰るので、小樽で三ッ石さんが待っている、と帰宅したところ、もう帰ったという(edzinoは三ッ石さんとは初対面で、臨終のとき付添った私の母から三ッ石さんにたいする偏見を吹き込まれていたらしい)。それであわてて山賀先生宅に電話したら、今日は山賀さん宅に泊まるから……という。そんな次第で随分久しくお会いしていない。

私が荷役人足の仕事をしていた時、三ッ石さんが旅行費用の補給をするためか、仕事をしたいという。それで会社に向けあつて臨時の人夫してもらったが、元来、肉体労働向きの体格をしていなくて、私たちと同じ量の仕事はこなせなかった。荷役の仕事はハイティーンから労働している人が多く、中年からという人はいない。なにしろ60kg

SALATO

の小麦袋を二つ、あるいは三つ肩荷役するのだから馴れないと危険である。もっと適当な事務職でもあるとよかったのだが、小樽に定住する訳でなく一時的滞在であるから、あまり労賃にならなくても致し方なかった。

しょっちゅう道東の山などに登山していたようで、今の三ッ石さんの肩書きからもそれが判る。=日本山岳会会員、日本自然保護協会会員、環境庁自然公園指導員、かつ植物研究者=とある。いつも山に登っている人、孤独な(孤高な)旅人という印象が三ッ石さんにはある。熊の沢山いる道東の雄阿寒岳にも登ったそうで、私なら恐ろしくて麓までも行けない。

三ッ石さんは中垣虎児郎さんと親しかったそうで、中垣さんはすでに故人であるが、どちらも日本のエスペラント界では独特の雰囲気の人だと思った……いわばアウトサイダー(野人)である。1950年頃だったか、本屋で『極北生活30年』というのを見つけた。そのちょっと前、「朝日グラフ」で主人公のヤン・ウェルツェルの写真を見たが、北海道のヒグマが立ちほだかったような髭だらけの太った大男。この本はエスペラントで出版され、それを和訳したのが中垣さんで、私にはとても面白かった。今は日本の女優さんが犬ぞりて探検するぐらいだが、50年前の北極圏は未開、暗黒の地で、そこに30年も生活した人の快々譚である。残念ながらこの本は知人に貸したまま返ってこない。

先日、名古屋の三ッ石さんから karto がきた。私の連載「エスペラント運動私史」を読んだので、とある。三ッ石さんからの karto は、私にはとても驚きだった、お元気だし、若々しいので。この私史(4)を書いてからと思ったが、はかどらないので中休みして karto をさしあげた。この交友録、三ッ石さん気を悪くしなければいいが、と思う。それとも呵々と笑うだろうか。

(90, junio, 26) つづく

☆朝日新聞90年05月07日付夕刊。1893年生れの画家・随筆家=曾宮一念がエロシエンコのことを。1914年来日したエロシエンコを「エスペラントと聞いていた。神近市子との結婚の噂が、日本追放の原因になったか」。

☆朝日新聞90年06月18日付朝刊。戦後4年間、シベリアで抑留生活を体験した高杉一郎が「エロシエンコの生誕百年祭にソ連エスペラント同盟から招待され、この7月初め、ソ連へ旅立つ」と。高杉はエロシエンコの翻訳者。

☆その高杉の訪ソ記が朝日新聞90年09月06日付夕刊に「彼の死後 年ごとに名は知れ 墓は立派になっていった」と題して掲載された。ソ連で「スターリン時代には抑圧されていたエスペラント運動と人類思想がよみがえっている現実をこの目で確めることができ」ともいう。

☆赤旗90年08月16日付に同党の『自由と民主主義の宣言』のエス訳が東京解放運動日友会のエスペラント有志の手で完成と。翌日付に、問合せ先の訂正記事。

朝日関係の資料提供は札幌の豊蔵正吾さん、他は編集部の収集。編集部には「前進」とか「自由意思」とか「マイナー」な媒体の資料もあります。ご希望の方は連絡を。なんなら取次ぎます。

★ Heroldo de HEL

n-ro 36

(1990, aŭtuno. = Konsultu vortaron!)

北海道エスペラント連盟機関誌

年会費 2000円

郵便振替: 小樽 0-17075 北海道E連盟